熊本教区　熊本地震 物故者１周忌追悼法要

遺族、僧侶250人 悲しみ新たに

「今でも夢であってほしい」

家族や友人、かけがえのない人を突然失ったあの日。悲しみ、悔しさ、再会を願う気持ちは消えない―。

昨年4月に起きた「平成28年熊本地震」。門徒27人が亡くなった熊本教区で4月6日、熊本地震物故者1周忌追悼法要が営まれた。会場の熊本別院（熊本市中央区）には、遺族や僧侶250人が参拝し、悲しみを新たにした。山階昭雄総務が挨拶し、晨利信・熊本教区教務所長が導師となって、阿弥陀経作法がつとめられた（写真）。全日本仏教会の久喜和裕事務総長が参列した。

法要の後、司教の安藤光慈さん（宮崎市・真光寺住職）が法話した。「私たち念仏者は、間違いなくお浄土に往生して仏とならせていただくことを今、確かにいただいている『現益』。そして、命が尽きるとき、お浄土に往生し、仏のさとりを得させていただく『当益』の2つをいただいている。『必ず浄土に生まれることができる』ということは、今を一生懸命に生きる力をもらっていること。被災してつらいこの世を、私たちは仏さまと一緒に、親鸞聖人も一緒に、お浄土に往かれた大切な人と一緒に、生き抜く力を与えてもらっている」と語りかけた。

晨教務所長は挨拶で、「この法要は亡くなられた方へ追悼の思いを表すとともに、被災された方へ寄り添う活動を継続していく決意を明らかにするもの。教区として『私たちに何ができるか』。今一度、問い直し、家族、親族、近しい人を亡くされた方、住む場所を失い先行きに不安を感じて困難な状況にある方、お念仏の道場である本堂が被災された住職の皆さまに寄り添っていきたい」と語った。

熊本県南阿蘇村立野で亡くなった高田一美さん（当時62歳、大津町・光尊寺門徒）の3女・高田尚子さん（31）は「地震に襲われた時、母と一緒の部屋にいた。すごい揺れで天井が落ちてきて、私は床と天井の隙間で助かったが、母は下敷きになった。父が決死の覚悟で私と母を救い出してくれたが…。何が起きたかわからず、今でも夢であってほしい。1年経って少しだけ現実を受け入れられるようになれた」と話す。一美さんの母・郷テルミさん（81）は「娘を亡くした悲しみを忘れることはできない。今でも娘のことを思い出すと、涙が止まらない。自宅は全壊し、避難所や仮設住宅を転々としているが、移るたびに仏壇を設置し、毎日仏さまに手を合わせている。あっという間の1年。これからは少しでも前向きに生きていけたら」と話した。

現在も益城町で暮らす下津光之さん（65、熊本別院門徒）は、地震当時の感覚が抜けないという。「大きな縦揺れと横揺れが立て続けに来て、下からドーンと突き抜けてくるような衝撃が伝わった。ベッドから飛び出して妻と一緒に外に出た後は、近隣の家々の安否確認をして回った。地震によって多くの人が被害を受け、身が引き裂かれるような思い。1年が経ち、復興に向けてがんばっていかなければと思うようになった。地震後は、仏さまの前で手を合わせるようになった。苦しい時だからこそ、阿弥陀仏のお慈悲が、とてもありがたい」と語った。

熊本教区（466カ寺）はこの地震により、本堂全壊21カ寺、大規模半壊24カ寺、半壊68カ寺、一部損壊107カ寺という甚大な被害を受けた。